

大聖人鎌倉を去る

一

大聖人が四月八日、鎌倉の殿中において、最後に一番強調したことは、真言宗に蒙古退治を仰せつけてはならぬと言ったことであつた。ところが、殿中間答の評判が、鎌倉の街の人々の口から口に、語られて、なんと、日蓮という坊さんは頑固な人だろう。これでは、佐渡に四か年流しておいたのが無駄だつた。まだまだ流しておけば、その強情がなおつたかも知れないと、評判をしてゐる最中の四月八日から、二日目の四月十日に、幕府が、祈雨の祈禱きとうを、真言宗の加賀法印定清という僧侶に命令したのであつた。真言宗の祈禱は、国家に害毒を流すものだ、大聖人が殿中において断言したのに、二日目に、真言宗の僧侶に祈雨せよとの命令が下つたのだから、鎌倉中では、大評判になつた。加賀法印が勝つか、大聖人が負けるか。法門の上の争いでは、素人にはさつぱりわからないが、雨がふるかふらないかは、誰れにでもわかる。しかもその雨は、自分

の家の屋根の上にも、自分の家の庭にもふるのだから、一步も出ずして勝負がわかるわけで、鎌倉の街の人々は、大聖人をへこます絶好の機会とこおどりして喜ぶものもいた。

真言修法の靈験あらたかと言われる、加賀法印（註一）という人は、どういふ僧侶かと言うと「此の法印は、東寺第一の智人、御室等の御師、弘法大師、慈覚大師、智証大師の真言の秘法を鏡にかけ」（全集九二一ページ）と言われる真言宗ではえらい人であった。

文永十一年は春からの早魃かんぼつで農作物は、殆どかれんばかりであったが、四月十日に加賀法印に雨の祈りの幕命が下ると、四月十一日から大雨がふつたのである。しかも風もふかず一日中しとしと慈雨がふつたのである。

雨がふつた。

雨がふつたぞ。

真言の祈りはかなわぬと、日蓮法師が、殿中で高慢げにいったが、どうだ、雨がふつたではな
いか。

わざわざ大聖人のお住居すまいになつている小町（註二）まできて、雨にぬれながら、

「どうだ、日蓮坊、これでも真言の御祈禱が、駄目だと言うのか、今お前の屋根にふつている雨は、真言宗の加賀法印さまが、ふらした雨だぞ」

「外に出て、この雨にあたれ……」

「くやしかったら、この雨をとめてみせる」

口々にどなつて、大聖人にきこえるように騒ぎたてる人々で、大聖人のお住居の周囲は一杯であつた。外で他宗の人々が騒ぎたてるのは、当然の話だが、大聖人の弟子の中でも、この雨のふるのを見て、がっかりするものが出てきて、うつぶんばらしに、大聖人にむかつて、

「真言の祈りが、かなわないぞと断言なさらなかった方が、よかつたのではないのでしょうか」と、庭にふる雨をみてくやしげに言うものがいたのである。

その言葉が、終わらぬうちに。庭の垣根ごしに、

「日蓮坊、くやしいだろう。今きいた話だが、時宗さまが、この雨に感心されて、金三十両と馬一匹を引物として、加賀法印に下さつたそうだ。それでも、真言の祈りはかなわないと言うのか、かなわないのはお前の方だ。鎌倉中の人々が手をこんな風にたたいて、喜んでおるのだ、お前のことは、こんな風に笑つておるのだ」

住居の周囲の群集は、音頭をとつて、手をただ今、大きな声をたててわらいたてるのであつた。

「これからあんまり、人をそしるのは、やめてもらいたいものだ」

またもやどつと笑い声をたてて群集は立ちさつてゆくのであつた。

このはやし声に、道理のわからぬ僧侶は興奮して、大聖人につめよつて、

「どうして、真言宗の祈りが、かなつたのでしょうか、訳をきかせて下さい。くやしくてたまり

ません。鎌倉中の人々の嘲笑わらいごえ声がきこえるような気がいたします」
と叫ぶものさえいた。

大聖人は、道理のわからぬ、自分の弟子を不愍ふびんに思うような顔をされて言われた。

「日蓮が、常に言っておられることを忘れたと見えるなあ、法華経をば戯論けろんとそしつた弘法大師の悪義が本当であつたならば、承久の乱に後鳥羽帝が負けよう筈がない。三院は三国に流罪、公卿七人は忽ちに頸をきられたのは真言の祈りがかなわなかつたからである。弘法は十住心論に、法華経は華嚴経におとつていと書き、寿量品の釈迦仏をば凡夫だと秘蔵宝鑰にしるしており、二教論には天台大師をぬす人とけなしておる。法華経をといた仏をば真言師のはきものとりにも及ばずと正覚坊は舍利講の砌りにかいておる。このような、まがつたことを申す人の弟子加賀法印が、日蓮に勝つならば、竜王は（註三）法華経のかたきとなり、梵天帝釈に竜王はせめられるであらう」

「でも、大聖人さま、今現にこの庭に、加賀法印のふらせた雨がふつておるではないですか、五十年前も前の承久の乱をもちだされても古いことで、鎌倉の大半の人々が知らないことだと思いません。何故雨がふるのでしょうか」

「だからこれには仔細しさいのあることだと申すのだ」

「仔細がある、どんなしさいですか」

大聖人の直筆である、種々御振舞御書によるとどんな仔細があるのですかと、この弟子は嘲笑あざわらつたと書かれておる程だから、大聖人の御心中もわからない弟子であり、また余程興奮性のつよいやからであったと考えられる。

「善無畏も不空（註四）も雨を祈って雨はふつたが、大風がふいて却って世人に迷惑をかけたと伝えられ、弘法は雨を祈つたが、三七日すぎて、雨がふつたと言う。日蓮からみればこの弘法の祈雨はふらなかつたと申してよい。三七、二十一日もたてば雨がふるのが当然で、たとえ、ふつたとしてもなんの不思議なことがあるうか、天台の如く干観（註五）の如く、一座でふらなければ……」

「ですから、加賀法印は一座で雨をふらしたではありませんか、それなのに仔細が……」

と、頑固に言いはる、弟子の口に外からどうつとという音がして、突風がふつこんで、思わず口をとじた。やがてその大風は燭台をぶつとばすと、しきみがばたばたと風にあおられて下に落ち、部屋はまつくらになつてしまったのである。弟子一同は、大聖人さまの前に思わず、ひれ臥すと、

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華經」

「南無妙法蓮華經」

と唱題するのみであった。

加賀法印の雨は、大聖人が、弟子を戒める言葉の終わらぬうちに大風に変つたのである。この大風の模様を大聖人の御自筆を以つて示そう。

「大風吹ききたる。大小の舍宅堂塔古木御所等を或いは天にふきのぼせ、或は地に吹き入れ、そちらには大なる光り物とび、地には棟梁みだれり。人々をも吹きころし、牛馬おおくたをれぬ。悪風なれども、秋は時なればなおゆるすかたもあり。此は夏四月なり、その上、日本国にはふかず但関東八箇国なり八箇国にも武蔵相模の両国なり、両国の中には、相州につよくふく、相州にも鎌倉、鎌倉にも御所、若宮、建長寺、極楽寺等につよくふけり、ただ事ともみえず、ひとえにこの祈り（加賀法印）の祈雨のゆえにやとおぼへて、わらい口すくめせし人々も興さめてありし上、我が弟子どもあらず不思議やと舌をふるう」（全集九二二ページ）

鎌倉中の人々も、この突風にふかれて、思わず大聖人の偉大さを知つたことであろう。人々をも吹き殺すとあるから、真言宗の祈りの雨がふるぞと、鎌倉の街々をこおどりして歩いていた連中が、吹き殺されたるうことは察してもあまりがある。

弟子達も大聖人を疑つたことを恥じたであろうし、殿中にて大言壮語した大聖人をへこまして

やろうと、たくらんだ幕府の面目もまるつぶれであり、鎌倉七大寺の和尚連中はこれでは、本当に由比ヶ浜に首を斬られるかも知れないと、坊主頭をひやひやさせたに違いない。

大聖人の真言宗の祈りはかなわないということが、誰れにもわかることで実証せられたのである。鎌倉の街に大聖人のかげ口をきく者はいなくなつた。

礼記の下に「人臣は三たび諫めてきかなければその君をさり、人子は三たび諫めてきかなければ泣いて親の意に従う」ということがある。

主君を三度諫めるに用いずば山林に交われという言葉がある。大聖人は文応元年七月十六日に立正安国論を献上して第一の国諫をなし、ついで立正安国論の予言が的中して、蒙古の来牒となつた。文永五年十月十一日、宿屋左衛門入道を通じて、国諫の書を幕府に呈して第二の国諫をなし、その故に佐渡の島にながされたが、赦るされて鎌倉に帰えると文永十一年四月八日、今度は殿中において、時宗を前にして、堂々たる第三の国諫をしたのである。堂宇をたてて帰依しようとなすまでだったが、本当の帰依ではない。

主君をいましめて山林に入ったものは、殷代の太公望は幡溪に、周代の伯夷はくいしゆくせい叔齊しゆくせいは首陽山に、秦の綺里季きりきは商洛山に等々の例がある。大聖人も、もはやこの例にならう以外なかつた。

(註一) 法印大和尚の位で僧正の位で僧綱の最上位である。

(註二) 小町字小町の本覚寺、吾妻鏡にみえる夷堂の地であるという。佐渡から帰えられるとここにすまわれたという。比企大学三郎の屋敷にすまわれたという説もあるが、妙本寺史にはのせていない。

(註三) 竜王は雨をふらせる神という。

(註四) 善無畏、印度の人で中央アジアをへて長安に、唐の玄宗に信任され密教々典を漢訳した。不空、北インドか中央アジア出身、唐の洛陽にきて出家す。密教付法六祖といわれ弘法に法を伝えた惠果は不空の弟子である。

(註五) 天台宗の僧、空也にしたがい大阪府箕面に金竜寺を建立した。

一一

古川柳に

日蓮や鎌倉さつて初鯉

とこのうがある。

大聖人が鎌倉を去ったのが、文永十一年の五月十二日だから、その頃が鯉のたべ頃なので、鎌倉はいせいのよい大聖人がいなくなつてからは、いせいのよいものは初鯉の売り声だけだと言う

意味の川柳である。

古川柳の祖といわれる柄井川柳は享保三年（一七一八年）の生れだというから、文永十一年は一二七四年で、聖滅四百三十七年後の人がえらんだ句だから、大聖人を追慕鑽仰してよんだ句であつたことで、現実とは少しことなつていたと思う。風俗史家の研究によると、「鎌倉近海に産する鰹は古よりその地方の産物として有名なれども、猶鎌倉時代の中頃までは、鰹節の外は、はかばかしき人の前にだすことなしさるものながら、その季には天皇の供膳にすうることとなりたり」とあるところをよむと、初鰹の珍重されたのは、特に江戸時代であり、鎌倉の街に四箇の格言を唱える威勢のよい、大聖人さまがいなくなつたことを、さびしがつて、江戸の古川柳がよんだものと思える。

五月十二日という日は大聖人さまにとって、一生涯において、三度の事件がある。大聖人が御出家されたのが、天福元年の五月十二日、御年十二歳であつた。次に弘長元年の五月十二日、御年四十歳で伊豆に御配流になつた。今また、文永十一年の五月十二日、建長五年より文永十一年に至る二十二年間、大聖人は、鎌倉を本拠とせられていたが、今のこの地をすてて、山深い身延の谷に入ろうといふのである。大聖人の胸中において万感せまるものがあつたらうと推測するのは凡智の者で、大聖人は「日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未來迄もながるべし」（全集三二九ページ）と言われたこの予言のために身延入山となり、法華経の広宣流布のた

めに深山に入山を決せられたとみるべきであり、末法の我等衆生のために入山せられたのである。文永十一年五月二十四日の「法華取要抄」を始めとして、二百三十余編の著述御消息があり、大聖人の御一代の著作の大半は、身延においてなつたことを思えば、大聖人の身延隠棲は単なる隠棲ではなく、末法万年にそなえての大聖人の大慈悲心の現われとみるべきである。

「十二日酒匂、十三日竹の下、十四日車がえし、十五日大宮、十六日南部、十七日このところ（身延の意）」と大聖人は自らのべられておる（全集九六四ページ）

この中で竹の下というのは静岡県駿東郡足柄村にある、御殿場の東北をさる一里、小山駅の西南一里の処で、酒匂川の上流の溪谷に臨み東に足柄峠がある。聖滅後のことであるが竹の下は新田義貞対足利尊氏の合戦場として名がある。竹の下では京都軍ふるわず、その中に、大友、塩谷が、尊氏の軍に内通したので敗戦し、官軍は京都に帰つた。ここにおいて東国の将士は尊氏に応じ、ついで尊氏西上するに及んで南北朝の大乱となるに至つた。

車返しは、静岡県沼津市旧城の東、黄瀬川西北辺の地名、ことの起りは山路などの嶮岨げんそな処の称、それよりは車を通じないので、返してやるの意味、即ち、大聖人の旅程からいえば、竹のより車返しの間は、車を通じない嶮岨な山路であつた訳である。沼津市旧城とは、北条早雲が、相、豆、甲信のおさえに三枚橋（現在も三枚橋町あり）の平城をつくつたことをさす。

仁治三年（聖歳二十一歳）の東関紀行に「車返しという里あり、ある家にやどり、たれ網釣、

なんどいとなむ賤しき者のすみかになや、夜のやどりありかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛人戒人の夜半の旅寝もかくやありけんとおぼゆ」とあるが、東関紀行の著者は不明だが京都の住人であることには間違いないから、右のような描写になったのは仕方がないが、もし、このような描写に間違いなしとすれば、これより、甲斐の山奥に入る大聖人としては、最後にかぐ磯の香の匂いに、一夜をなつかしく感ぜられ、最早古郷房州には帰ることなしと定められた大聖人にとっては、一しお感慨無量の一夜であつたと思われる。

曾我物語に「人生れて三国に果つるは習いなり」とある。

生れた処修業の処、そして死ぬ処が違うというのが、人間の習いというのだが、偉い人はみなそうなつておる。大聖人さまも当然そうであるが、身延入りの旅程においての一夜としては、車返しの一夜は中々に意味ある一夜であつたらう。十五日、大宮とは、現在の富士宮市である。いずれの場所に宿泊されたか断定はむずかしいが、浅間神社の別当の処に宿られたと推測する。それは、「此の経を持つ人をば、いかでか、天照太神、八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給うべきとたのもしきことなり」（全集一五七二ページ）とあることから察せられる。

それよりも「五月十二日に鎌倉を出でて、同十七日甲州飯野の御牧、波木井の郷身延山にこもる。時機不相応のため摂受の行たりと雖も、日夜朝夕に法華経を転読す。日本無隻の名山富士山にいんろう隠籠せんと欲すと雖も檀那の請によつて今此の山に籠居す。我が弟子中にもし本門寺之戒壇の

勅を申し請て、戒壇をたてんと欲せば、すべからく富士山にきづくべし」(法華本門取要抄)とあるを考えると、この大宮の一泊も大聖人にとって大いなる意義がある。二十二年も富士のみえる鎌倉におられた大聖人さまが、明日からは山にかかって富士のみえぬ道程となるのである。富士のみおさめと申してもさしつかえがない。

日興、日向、日持、日頂等々の諸弟子がお伴を申ししたが、特に大聖人さまの日興をみる眼がことなつておつたに違いない。なぜなれば、日興上人一人が「富士は大聖人が本願を祈る所なり」と書いておるからである。

「甲州飯野、御牧、波木井の三箇郷の内、波木井と申す、此の郷の内、戊亥の方に入りて、二十余里の深山あり、北は身延山(一一四七・九米)南は鷹取山(一〇三六米)西は七面山(一九八二・四米)東は天子山(一四〇〇米)なり板を四枚ついたてたるが如し、此の外をめぐりて四つの河あり、北より南へ富士河、西より東へ早河、此れはうしろなり、前に西より東へ波木井河の中に一の滝あり、身延河と名づけたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか将又漢土の天台山の来れるかと覚ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる処あり。此処に庵室を結んで」(全集一〇七七ページ)と大聖人さまは自らのべられておる。また「去る文永十一年六月十七日にこの山のなかに木をうちきりて、かりそめにあじち(庵室)をつくりて候」(全集一五四二ページ)

とあるので行学日朝（身延十一代）は「その六月十七日に此の山を開闢し玉う」と身延御書抄に書いておる。

さて大聖人を招じた檀那である波木井氏については、堀日亨上人著、「日興上人祥伝」より文章を拝借する。（日興上人祥伝七八七ページ）

「実長入道法寂日円は甲斐源氏にして、南部三郎光行の六男で、南巨摩郡の波木井に住していたから、波木井殿と称せられた。一族は甚だ広くして日興上人に化せられておる。

日円は性剛腹にしてまた直截ちよくさいであり、時流にもれずして念仏を行ぜしが、鎌倉上下の際その沿道である富士河西の四十九院において興尊と相知るに至った。初老と青年と俗と僧との異なるも、ともに甲南の出身で、意気相投じてしだいに宗議にも進み、一族とともに念仏をすてて法華に帰し、みな興尊の門にはいり、播磨公越前公の僧侶をも出すに至った。

文永のはじめ、興尊にみちびかれて、鎌倉にて大聖人に謁して信仰を増進したるのみならず、その聖威にうたれてますます意気をつよくす。大聖人の強折大いに為政者にいれられず、また一般道俗の怨嫉するところとなり、流離やむことなければ、ついに中央政府を去られんとする時、各地の有縁より懇請ありしを退けて、身延の幽境に移らる、これは、一つには中央政府に遠ざかるの意なりしも、まったく興尊の特縁ある波木井峽に導きしものである」と簡潔にのべられておる。

